

ビワマス刺網漁における2023年夏季の漁況の変動要因

大前信輔

1. 目的

2023年夏季のビワマス漁は特に刺網で不漁となり、8月前半の漁獲量は過去10年と比べて著しく少なかった。台風通過(8月15日)後の8月後半の漁獲量は過去10年平均を上回るまでに回復した(表)。そこで、観測データのある透明度、水温および濁度の観点から漁況の変動要因について考察した。

表 半月毎の刺網でのビワマスの漁獲状況

	7月前半	7月後半	8月前半	8月後半	9月前半
23年漁獲量(kg/把)	0.5	0.4	0.1	1.0	0.5
2013~22年平均漁獲量(kg/把)	0.7	0.7	0.7	0.7	0.6

※2013~21年は漁獲日誌、2022~23年は漁獲情報報告による

2. 方法

透明度は滋賀県琵琶湖環境科学センターの環境調査情報データベースから今津沖の7月と8月の半月毎のデータを用いた。また、日別降水量は気象庁の気象データベースから彦根の日別データを用いた。水温鉛直分布および濁度鉛直分布調査は台風通過後の8月21日に安曇川沖で多項目水質計を用いて行った。

3. 結果

透明度は2023年7月から8月に過去10年と比べて高い状態が続き、特に8月前半には10mを上回った(図1)。透明度の高さはビワマスによる刺網の視認性を高め、漁獲効率を低下させた可能性が考えられた。

なお、漁獲が回復した8月後半も透明度は高かったが、8月15日の台風がもたらした大雨(図2)で8月後半には刺網が設置される水温躍層付近に濁りが拡散しており(図3)、刺網の視認性が低下したことでビワマスの漁獲

が回復したと考えられた。

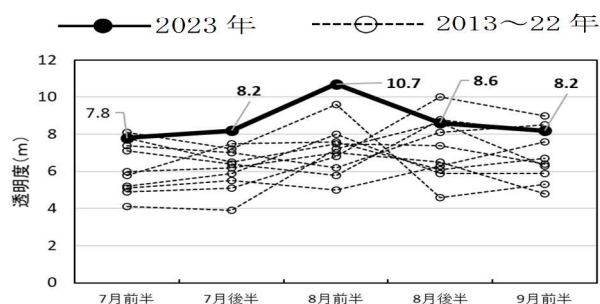


図1 今津沖における透明度の年別の半月毎の変化

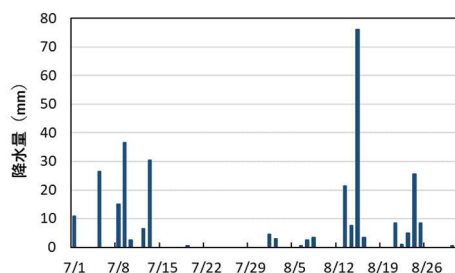


図2 7月から8月の彦根における日別降水量

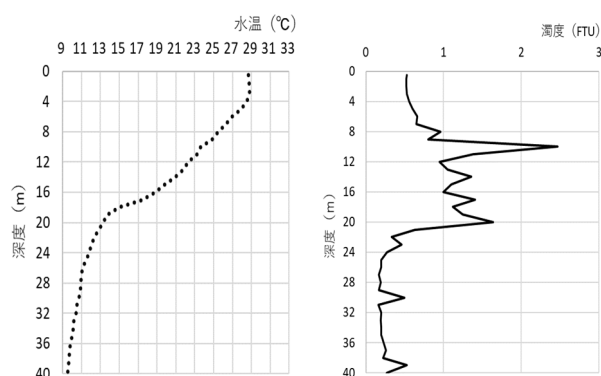


図3 8月21日の安曇川沖における水温鉛直分布(左)と濁度鉛直分布(右)